

【1 分解説】生産年齢人口とは？

人財開発コンサルティング事業部 主任講師 平岡 一弘

生産年齢人口とは、年齢別人口の三つの区分、年少人口（15歳未満）、生産年齢人口（15歳以上65歳未満）、老年人口（65歳以上）の一つで、国内の生産活動や消費の中心的な担い手であり、同時に社会保障制度を主に支える人口です。

日本の生産年齢人口のピークは1995年の8,716万人、総人口の69.4%を占めていました。その後少子化の影響などもあり2023年10月現在7,395万人、同59.5%と割合で10ポイント弱減少してきました。国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（令和5年推計）」によると、今後一層の減少見通しで2050年時点で5,540万人、2070年には4,535万人との推計が標準的なシナリオとして公表されています。

また、日米の総人口に占める割合を2020年から2050年で比較すると、日本が58.5%から51.4%に減少するのに対し、米国は65.3%から減少するものの60.8%にとどまっています。このように、日本の生産年齢人口は米国と比較しても大きな減少となり、かつ老年人口は2020年の29.6%から2050年には37.5%にまで増加するとされています。

政府は「2030年代に入るまでの6~7年が少子化傾向を反転できるかどうかのラストチャンス」として「こども・子育て政策」に取り組んでいます。更に社会保障制度の持続可能性を高める観点を含め、女性や高齢者の活躍推進にも注力しているところです。人口構成の問題は決して容易には解決できるものではありませんが、今後の政策動向に注目です。